

個別最適な学びの実現に向けた ICT・AT リソースの整備と活用

特別支援教育課

1 現状

- 一人一台端末が整備され、電子黒板等の ICT 機器の整備が進んでいる。今後は、児童生徒一人ひとりが個々の力を最大限伸ばし、生涯にわたり社会とのかかわりを持ち、自分らしく学び生活できるよう ICT 機器の有効活用を進めていくことが求められている。

2 具体的な取組

(1) ICT 機器の整備や推進体制を構築

- ICT を活用した教育の充実に向け、基盤となる ICT 機器を整備
 <機器整備>・1人1台端末の整備（児童生徒、教職員）、電子黒板、Wi-Fi 環境の整備（全教室）

- ICT 活用推進ブロックリーダー（自立活動担当教員 4 名）による各校への訪問支援を実施

【令和 5 年度の特別支援学校での対応件数と内容】

対応内容	参観	相談	研修	その他
令和 5 年度 (10 月～3 月)	249 件	264 件	26 件	40 件

- 特別支援学校各校に ICT 活用推進担当の配置（19 人）による校内支援の実施
 ⇒年間 6 回の ICT 活用推進担当者会で、研修会や実践報告会等を実施して専門性向上を図る。

《校内での支援例》

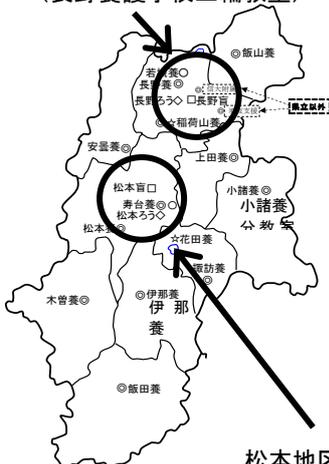
- ◇各学級からの相談に対しアセスメントツールを活用し、個々のニーズを把握
- ◇アセスメント結果を踏まえ、校内にある支援ツールを誰でも気軽に試しながら活用・支援
- ◇教員への支援ツールの活用例を提示し、教員の支援力の向上研修

(2) ICT・AT リソースセンターを県内 2ヶ所に設置（令和 5 年 10 月）。

⇒機器の整備と整備した機器を活用したトータル支援により、児童生徒一人ひとりの個別最適な学びの実現に向けた取組を展開。

① ICT・AT リソースの整備

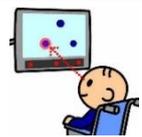
長野地区
 （長野養護学校三輪教室）



松本地区（設置場所：松本ろう学校）

〈ICT・AT リソースの整備内容（例）〉

- 主に高額な ICT 機器、障がい特性に応じた ICT 機器等
 - ・視線入力装置、上腕運動補助装置等
 - LD 等、学習上の困難のある児童生徒への支援（ICT 機器、アセスメント）
 - ・LD 等、各種アセスメント用アプリ等
- 〈拠点で選定し、各校で管理するもの（例）〉
- 多くの児童生徒に共通するアプリケーションや ICT 機器等
 - ・発達段階や障がい特性にあった各種アプリケーション、タッチペン等
 - 目的や使い方を各校に説明するための機器やアプリケーション等
 - ・入出力装置、固定具、標準アプリケーション等



② リソースセンター（2か所）での対応件数と対応内容の例

- ・ 令和5年度の相談件数⇒32件（10月～3月）

《具体的な対応例》

- ◇視線入力装置や肢体不自由のある児童生徒に使用する支援機器の利活用の可能性を探り、学校での利活用に繋がった。
- ◇児童生徒の学びの活性化や学びの最適化、将来の自立や社会参加に向けたICTの活用により、今まで支援ができなかった事例に多様なアプローチが可能となった。
- ◇アセスメントによって学習面や生活面での困難さを的確にとらえて、ICTの効果的な活用をし、児童生徒の困難さを取り除いたり、減らしたりして学びを保障することに繋がった（小中学校・高等学校）。

(3) 外部専門家を活用した研究体制

⇒ ICT活用推進担当者（テーマ①、②）と通級指導教室及び特別支援学級等の担当者（テーマ③）が、3つのテーマに分かれ、外部専門家と連携して包括的に研究を推進。

① 「先進的な機器を活用した支援」

- ・ アバターロボットによる校外学習への参加、プログラミング学習を通してのコミュニケーションや自己調整力の育成といった新奇性の高い実践の充実。

② 「重度重複障がい児生へのアセスメントに基づいた支援」

- ・ 視線入力装置等のテクノロジーによるアセスメントや因果関係理解のツールとして活用。

③ 「読み書きを中心とした通常校における発達障がいがある児童生徒への支援」

- ・ モデル校において読み書きに関する代替手段（キーボード入力等）等の合理的配慮の検討。

(5) 「ICT活用支援サイト」の運用

《長野県内のICT活用事例や活用のポイントなどを紹介（事例の一部）》

- ・ タブレット端末を用いた朝の会の進行
- ・ 遠隔操作ロボットを使った交流学习
- ・ 日記アプリを使った文章作成
- ・ タッチペンを使った余暇活動
- ・ タスクアプリを使った活動支援
- ・ 視線入力装置を用いた「見る」学習
- ・ タブレット端末を用いた体調管理



3 成果と課題

- 特別支援学校においては、ICT活用推進ブロックリーダーとICT活用推進担当者の連携により各校で好事例が蓄積され始めている。
- 小中学校においては、「特別支援教育におけるICTを活用した個別最適な学び研究会」を立ち上げ、外部専門家から研究校（モデル校）への継続的な指導を受ける機会を設けるとともに、研究校の実践発表をオンラインで公開するなど、情報発信をしている。
- ▲ ICT・ATリソースセンターへの相談件数も増え、障がいのある児童生徒一人ひとりの障がいや認知特性に応じたICTの利活用による個別最適な学びの実現に向けた支援体制の基盤はできつつある。しかし、その成果は一部の子ども達の活用にとどまっている。今後は、一人でも多くの子ども達の学びがICTの利活用により充実するよう、リソースセンターの機能を強化するとともに、好事例の横展開を加速させる取り組みが必要となる。